メアリ・ウルストンクラフト（Mary Wollstonecraft）(1759-1797)
―「人権」を通して考えるマイノリティと社会―

メアリ・ウルストンクラフトは、18 世紀後半にイギリスで活発に執筆・出版活動をした思想家です。彼女は、何よりも、「フェミニズム」という言葉も存在しなかったその時代に「女性の権利」を明確に主張したことで知られています。

イギリス思想史・女性史が専門の梅垣千尋氏は、ウルストンクラフトの代表作『女性の権利の擁護』についてこう説明しています。

> ウルストンクラフトが論じたのは、ひと言でいえば、女性も男性と同じく「理性」を与えられた「人間」という存在なのだから、女性が「人間」としての生き方を阻まれている状況は、それ自体として不当であり、かつ社会にとっても不利益である、ということである。彼女はさらに、この状況を変えるためには、女性の側に意識改革を迫ったり、現状の制度を部分的に修正したりするだけでは不十分で、すでにできあがった社会の仕組みや人びとの価値観を根本から見直し、変革する必要があるとも主張した。[1]

そもそも、女性と男性が同じ「人間」として平等な権利を持つという、今では自明の考えが、ウルストンクラフトの時代には革新的なビジョンでした。教育、文化、政治…あらゆる分野で女性が十分に権利を認められなかった状況にウルストンクラフトが異議を唱えたのは、彼女自身の型破りな生き方とも深くつながっていました。

十分な教育を受けられず、19 歳の時から家庭教師などをしつつ文筆の道を志ざしたウルストンクラフトは、子どもや女性向けの読み物や、翻訳などを出版するチャンスを自分でつかみ、フランス革命がヨーロッパを揺さぶる激動の中、1790 年、エドマンド・バークの著作を批判した『人間の権利の擁護』で一躍名前が知られるようになります。続く 1792 年に出版したのが『女性の権利の擁護』です。さらに不倫の恋や未婚での出産を経て、思想家として同志のウィリアム・ゴドウィンと結婚しますが、第二子の出産から 11 日後に 38 歳の若さで亡くなりました。（なお、この第二子は、小説『フランケンシュタイン』の作者メアリ・シェリーです。）

ウルストンクラフトの変革のビジョンは現在どこまで達成されたでしょうか。もし彼女が現代に生まれていたらその知性と情熱を何に注いだか、想像してみてください。

---

[1] 梅垣千尋 『女性の権利を擁護する―メアリ・ウルストンクラフトの挑戦』白澤社、2011 年